

津興々味



▲荒雄川神社宮司の高橋久俊さんによると、彫刻の製作者後藤貞行は、代々宮司を務めていた高橋さんの家に逗留(とまりゆう)し、馬の生態を研究して金華山号を製作したそうです。その昔鬼首には伊達藩の隠し牧場があり、慶長遣欧使節団の支倉常長が帰国の際に外国馬を連れ帰り、鬼首でひそかに育てたという言い伝えが残されています。



このコーナーでは、「大崎ライフ」をより楽しむための物や技、場所などを毎月紹介していきます。

鳴子温泉鬼首地区発

名馬・金華山号を訪ねて



▲9月8日には荒雄川神社のお祭りが開催され、神楽や素人演芸会などを行い、鬼首地区の人たちみんなで楽しみました。金華山号は、昔から子どもたちに大人気です。



◀鳴子ダムの上流国道108号久瀬大橋近くの交差点から、スキー場方面に200メートルほど上ると荒雄川神社の鳥居が見えてきます。

両耳を「ん」と立て、気高く胸を張り、前足を蹴り上げ躍動する馬。馬体に浮き出した血管の具合までリアルで、今にも駆け出しそうな姿です。
鳴子温泉・鬼首の荒雄川神社境内に祀られている主馬神社では、明治天皇の御料馬「金華山号」の木像を拝観することができます。
作者は、馬の彫刻にかけては当代随一といわれた初代後藤貞行で、皇居前の楠正成の銅像も馬の部分は同氏の作品です。
金華山号は明治二年鬼首に生まれ、水沢(現在の岩手県奥州市)の商人に競り落とされ、やがて水沢県庁の所有となりましたが、明治九年の明治天皇東北巡幸の際に一行の目に留まり、御料馬となり名前も金華山号と改められました。
明治天皇は、馬をこよなく愛したことでも有名ですが、その明治天皇の寵愛を最も受けたのが金華山号だっ

たのです。
金華山号は御料馬の中でもたぐいまれな名馬といわれ、数々の逸話が残されています。
軍事演習の天覧の時、砲声の音でほかの馬がうるたえる中にあつても、陛下の騎乗する金華山号だけは微動だにせず事なきを得ました。
また、足音だけであるじの登場を察知し、その姿を見つづける(近寄り)、おじぎをして騎乗の態勢を整えた、とも伝えられています。
明治二十八年六月、金華山号は老衰のため死にしましたが、愛馬の死を悼んだ明治天皇は、剥製として残すことを命じ、その姿は今も、明治神宮外苑にある聖徳記念絵画館に保存されています。
明治三十三年には、荒雄川神社宮司の発案で等身大木像を主馬神社に奉祀し、産馬の隆盛と畜産の振興を祈られ、今でも地元の人から大切にされています。

情熱 大崎

「世界の舞台で他国の選手と対等に戦うため、もっと技を磨きたい」と話す畑さん。難しい自然のコースを攻略するため、今日も彼女はバトルを握ります。

急

流のコースを岩などをよけながらこぎ下り、タイムを競うカヌー競技のワイルドウォーター。高度な技術が必要とするこの競技で、国内はもとより世界の大会に出場し、活躍しているのが畑良枝さんです。

畑さんが鹿島台商業高校一年生のとき、カヌー選手として活躍した先生が同校に赴任し、カヌー部を創設したことが、競技を始めるきっかけとなりました。顧問の先生から誘われ気軽に入部したものの、辛い練習の日々が続き、何度かやめようと思ったそうです。それでも、流れのない池・沼・湖の中で競う「フラットウォーター」の大会で成績を残せるようになると、「もっと上達したい」と向上心がわき上がり、石巻専修大学へ進学。ますますカヌーに没頭していきます。

大学では、競技の種目を「ワイルドウォーター」に転向しましたが、想像以上に厳しいものでした。「沼や湖など違い、急流や落差のある川での競技なので、うまく操作できず何回も転覆しました。最初は怖かったですね」。畑さんは当時を振り返ります。

しかし、カヌーへの情熱と必死の努力で恐怖心を克服し、大学四年生のときにはみやぎ国体で八位に入賞します。大学卒業後も働きながら練習に励み、国内の各大会で好成績を収め、今年の六月には、イタリアで開催されたワイルドウォーターの世界選手権に日本代表として出場しました。

愛艇を操り

激流を突き進む

カヌー選手

畑良枝さん(鹿島台地域)



▲4月～10月のシーズン中は、職場に近い加美町の「鳴瀬川カヌーレーシング競技場」で、ほぼ毎日早朝と夕方に練習を行います。休日には、天然のコースがある福島まで愛車で移動し、腕を磨きます。現在は、10月17日(金)から3日間、新潟県で開催される平成20年度日本選手権最終戦に向け、調整中です。